

成願寺

報 季

125

令和2年8月18日
(2020年)

目次	
「七億仏の母―寛大なる准提観音―」来馬正行	1
文化財保護デーの報告	6
成願寺中野たから幼稚園卒園遠足の報告	7
山内短信	8

発行 多宝山成願寺
〒164-0012 東京都
中野区本町 2-26-6
電話 03-3372-2711
制作 地人館

平成三十一年春の観音詣り説教

七億仏の母―寛大なる准提観音―

東京都観音院住職 来馬正行

おはようございます。本日は当観音院へお詣りくださいます。ありがとうございます。成願寺様へは、平成十八年十二月十八日に、「納めの観音」の集会に拝登。お話をさせていただき、それ以来、十三年ぶりに皆様にお目にかかれました。



東京都観音院住職
来馬正行老師

秋彼岸法要のお知らせ

九月十九日(土) 彼岸入りの日

十一時 檀信徒先祖霊位供養会

- ・ 新型コロナウイルス感染防止のため、右記の供養会は僧侶のみでお勤めいたします。ひまわり師匠の講談と、檀信徒の皆様が参列しての法要はありません。
 - ・ お申し込みのお塔婆・回向札は十九日の法要後、本堂内に並べますので、各自お持ちください。
 - ・ 十九日～二十五日の彼岸期間中、供養料・お届けの納金を承ります。供物(弁当は無し)を用意しております。
- ### 当山における新型コロナウイルス感染症への対応
- ・ 普段通りにご参拝いただけます。門戸を閉じることはありません(朝六時開門～夕五時閉門)。
 - ・ 毎月十八日の観音様の縁日祈禱は通常通りに修行いたします(秋の観音詣りは未定です)。
 - ・ 金曜定例坐禅会は当面休会。
 - ・ 諸活動(井上坐禅会、写仏の会、仏像彫刻、沖繩空手)については、当山ホームページをご参照ください。

このお寺の開創は、今から三百二十余年前、三代將軍家光の御代に、松江藩主で家康の孫に当たる松平直政が下屋敷に観音堂を建立。屋敷引払いとなりますが、跡地を開拓した三右衛門という名主が観音堂を継承。その後、ご開山の盛岳栄見大和尚が観音像を安置したことにより幕府公認の正式な寺院、観音院となったと伝えられております。その頃の江戸は街並みも整備され、都市として栄えていたわけですが、明暦の大火や行人坂の大火に知られるように大火火事の多い街でございました。当地は江戸から見ますと、西の方角に位置しておりまして、火事で焼け出された人々がだんだんと移り住み、幕府の新田開発（享保の改革）によって発展した土地柄でございませう。

そういう当山も、江戸時代の文化九年、文政八年、昭和五年と三度の火災に遭い、旧伽藍を焼失しております。本日お詣りくださっているこの伽藍は、昭和五十七年の本堂客殿の再建からはじまり、山門、鐘楼等を建築復興して、現在の寺観が整いましたのは平成七年のことでございます。

私は二十代でこのお寺の住職になり、以来先代、先々代の悲願でもありました伽藍の復興に心血を注

いでまいりました。いろいろな方の思いやお力によって、このお寺が再建されましたことは、今更ながら、観音様の功德の賜物と思っております。成願寺様もその始まりから観音様と大変ご縁が深いと伺っております。今日は、観音様の功德について、少しお話をさせていただきますと思います。

法華経「諸経の大王」

先ほど皆様、「観音経」をお唱えくださいました。皆様がお唱えになったのは、全部で二十八品（巻）ある「法華経」の第二十五品です。「観音経」と呼ばれることが多いのですが、正式には「妙法蓮華経みょうぼうれんげきょうかんぜんおんぼさつふもんほん観世音菩薩普門品」と申します。「法華経」は大乗経典の中でも中心となるお経で、簡単に申しますと、非常に行き届いたお経、バランスのとれたお経であると言えるかと思えます。「諸経の大王」とも言われる「法華経」でございます。比喻、方便が巧みに説かれてるのが特徴の一つかと思えます。「法華経」の古いものは、サンスクリット語のチベット本が残っておりまして、岩波書店から翻訳されたものが出版されていますが、実は私たちが親しんでおります漢訳版は、もっと以前の原始的なサンスクリット版を

鳩摩羅什(三三〇年頃〜四〇九年頃)というお坊さんが中国南北朝時代に漢訳したものです。

「法華経」は経典の説き方が念入り、老婆親切に説かれておりまして、口語体と詩とで説いています。非常に文学的な表現を用いて、多くの人々に深く味わっていただけのような工夫がされておりまして。それはなぜかと申しますと、昔は文字を使いませんでした。では、古い経典を学ぶために皆どうしたかと申しますと、暗記をしたんです。どうしたら、暗記がしやすいのかと申しましたら、口語体でわかりやすい表現をした後に、いま一度、詩(歌)で覚えるようにしました。みなさんもお風呂で良い気持ちになりたりしますと、お気に入りの歌を口ずさんだりされるでしょう。これは、人間の記憶の中で自分が良いと思うものがあつて、それが自然と折にふれて口について出るという事なのです。

ですので昔の人たちは、文字が書けなくても「音」で教える覚える、記憶するという方法をとった。これが経典の一つの歴史でございます。そのようにしてお経は説かれて、伝わってきているのですね。

お釈迦様は「対機説法」と申しまして、その場、その時に居合わせた人々にとって一番ふさわしい形

で伝えるために、相手に思いやりある言葉を選んだと言われています。大乘経典の中でも特に「法華経」はその工夫がなされていると言われておりまして、鳩摩羅什というお坊さんは、そのことをよく理解されていて、とてもうまく漢訳されています。「観音経」も大変素晴らしい漢訳がなされ、構成されています。みなさんが先ほどお読みになったのは、「普門品偈」と申しますが、実は後半部分の詩を讀んでいらつしやつた。つまり、歌なんです。言われてみれば、声に出しやすい、読み上げやすいわけですね。それと比べますと、前半部分はやや読みにくい。後半を詩にすることで、みなさんの記憶に残るように工夫されているのです。みなさんのご記憶に「念彼観音力」、彼の観音の力を念ぜよ、ということですが、しつかりと刻まれていることと思えます。なかには、「念彼観音力」だけは知っています、なんて方もいらつしやいます。それが良いのです。

母のような広大な利益

当山の観音様は准提観音様です。代表的な観音様、七観音のうちの一つに数えられますが、実際にお祀りされているのは、聖観音や十一面観音、千手観音

がよく見られ、准堤観音はちょっと珍しいかなと思います。みなさんにお話をさせていたただくにあたり、テキストを配らせていただきましたが、私は大学時代に仏教美術を選択科目に受講しておりまして。インド仏教美術の研究においての大家であった逸見梅栄（一八九一〜一九七七）先生の元で学ぶことができました。本日みなさんには特別に逸見先生の解説のうちの准堤観音の項目をお渡しいたしましたので、またゆっくりお読みいただきたいと思います。

テキストを開いていただきますと、最初のページに「唵阿盧力迦沙嚩賀」と出ておりますが、観音様の霊場に参拝されます際に、まずはお唱えになられると良いかと思えます。これは七観音の第一に数えられる聖観音様の真言でして、意識をしますと、「仏の教えに随順して実直に生きる努力を惜しみません」となります。いずれにしましても、観音様を礼賛し、帰依するという誓いにも似た言葉でございます。

その次のページに准堤観音の絵がございますが、これは私が若かりし頃に描いたもので、手前味噌でございますが、わかりやすいかと思いい、ご紹介しております。准堤観音の真言は「オン・シャレイ・シュレイ・ジュンテイ・ソワカ」。別名を「七俱胝仏母」。

仏の母だというのですね。

准堤観音は、聖観音、千手観音、十一面観音、如意輪観音、馬頭観音と並ぶ六観音の一つと申しました。聖観音様はとくに立像ですと、お身体が女性的であるようにも感じられますが、これは日本独特の造形でありまして、はつきりと女性であるのは准堤観音だけ。准堤観音の「准堤」は、ヒンドゥー教のシヴァ神の妃である女神チュンダー、(ドウルガー、チュンディーとも)の音に漢字を当てたもので、漢字そのものに意味はないとされています。そのため、「准胝」とか「準胝」と表記する場合もありますが、いずれにしてもその意味は、「清浄」とか「妙」の義であるといわれています。

別名であります「七俱胝仏母」の意味は、七億仏の母、ということですが、これは准堤観音の功德が廣大無辺であり、それを形容した数と言われています。災難を除くために礼拝する人、寿命を伸ばしたいと礼拝する人、病気を治したいと礼拝する人、准堤観音は、あらゆる苦悩する人々の祈る心の中にいつくしみを育み、授けてくださるというのです。祈りは正しく生きる姿勢です。

それから准堤観音様は結跏趺坐をされています。

つまり、坐禅をされているのです。「七俱胝仏母准提経」という経典に、

不二法門を求むるものは、両臂を觀すべし、
四無量を求むるものは、四臂を觀すべし、
六道を求むるものは、六臂を觀すべし、
八聖道を求むるものは、八臂を觀すべし、
十波羅蜜を求むるものは、十臂を觀すべし、
乃至

三十二相を求むるものは、三十二臂を觀すべし、
八萬四千の法門を求むるものは、八十四臂を觀すべし、
如上を觀想すれば、當に一切如来の三摩地門に入るべし。

とございます。「三摩地門に入る」、と言いますのは「三昧」ということなのですが、禅宗では特に大切な言葉でございまして、自然な姿に戻ると申せば良いかと思えます。つまり坐禅を行じている姿を称して「三昧」と言っております。お釈迦様は坐禅をしてお悟りになられたわけですが、ここに大切な意味がございます。私たち人間のわがままで自分勝手な己、それを休ませるためにはどうしたら良いのか、それが坐禅の姿なのであります。お釈迦様は非常に激しい修行を六年もされたわけですが、その結果た

どり着いたのが人間の自然な姿「三摩地」であったということが「七俱胝仏母准提経」に示されているのです。

最後に「観音の願行」ということに触れたいと思います。「観世音の善き行いは、もろもろの方向や場所です苦しんでいる人々にふさわしい働きをしているということ。人々を救わんとする大いなる誓いには海のごとく深いものがある」。そういった仏の功德、特に布施（施し）によって私たちは生かされ、守られているということなのです。布施という自然の恵の中、また自分の意思とは関係のない身体の働き、これも布施です。どうかそういう事に気づかれて、大切に生きていただければと思います。合掌

来馬正行 著

『そうじで清めるところと暮らし』
マガジンハウス刊
本体 1,320円 (税込み)

文化財保護デーの報告

去る一月二十四日（金）、境内において文化財保護デーの消防演習が行われました。文化財保護デーとは、昭和二十四年一月二十六日に法隆寺金堂が炎上し、壁画が焼損したことに機縁しており、全国で文化財を保有している神社仏閣などで、消防演習、防火訓練が行われています。

成願寺では二年に一度、中野消防署、消防団、災害時支援ボランティア、東郷町会防災会、成願寺自衛消防隊の合同で実施しています。

朝十時、本堂から僧侶が「火事だー！」と大声で叫びながら飛び出していきます。寺務所ではただちに一一九番通報、「中野区本町二の二六の六成願寺で



火災発生の一報を 119 番（訓練）



本尊様に見立てた箱を運び出す



本堂に向かって一斉放水



たから幼稚園ご父母の消火訓練



消防車を見学する園児

す。本堂より火災が発生しました（訓練です）。同時刻に本堂では、成願寺自衛消防隊が本尊様などの文化財（に見立てた箱）を素早く運び出します。災害時支援ボランティア、東郷町会防災会による初期消火が行われ、その後、消防隊、消防団が到着して本堂に向けて一斉放水が実施されました。中野たから幼稚園から、年長児四十六名が見学に訪れていて、放水が始まると大歓声が上がりました。放水訓練のあと、住職と中野消防署長より訓示がありました。訓練はこれで散会となりましたが、消防士さんと消防車が残り、幼稚園のご父母と先生方に消化器を使用した消火訓練を体験させてくださいました。子どもたちは、消防車を間近で見せていただき大興奮、大満足でした。

成願寺中野たから幼稚園卒園遠足の報告

去る二月二十八日
（金）、中野たから幼稚園
園年長組の卒園遠足
が行われました。

例年、横浜市鶴見の
大本山總持寺へ参拝
し、山内の見学、千畳

敷という広い本堂でのお焼香、坐禅などをさせていただきます
ただいていますが、總持寺からの新型コロナウイルス
ス感染予防の要請に応じてやむなく中止に。そこで、
先生方が工夫をして、成願寺を会場に卒園遠足を行
いました。



南書院でスケジュールの確認



本堂で修行する最後の坐禅



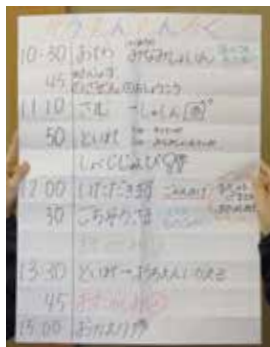
ご本尊様にお焼香



感謝の気持ちで本堂を雑巾掛け



五観の偈を唱える子どもたち



きれいに揃えられた靴

園では年長になると、毎月本
堂へ参拝し、脚下照顧（靴を揃
える）から始まり、礼拝、正座
合掌、坐禅、お焼香などを修行
しています。本来ならば總持寺
においてこれら修行してきたこ
とを集大成として行わせていた
子どもたちは幼稚園最後の本堂
での坐禅や作務を立派に行いま
した。
保護者のみなさんが用意してく
ださったお弁当の前には、五
観の偈をお唱えしました。これ
は、食事への様々な感謝、好
き嫌いなどせずにといただ
きますというような内容の偈
文で、子どもたちは大変元
気にお唱えをして、嬉しそう
にお弁当をいただきました。

山内短信

◎孟蘭盆会の報告

七月十一日(土)、当山で一番盛大な年中行事である孟蘭盆会が厳修されました。コロナウィルス対応で、檀信徒の皆さまには参列をご遠慮いただき、僧侶のみにてお勤めをいたしました。



法要の様子



檀信徒に手にする塔婆された供養

訃音 去る、八月十一日、新潟県洞照院東堂

塚野照一老師が遷化されました。世寿九十歳。

塚野老師は当山の大本若会、孟蘭盆会、先代本葬、三十世住職五十回忌などの大行事の全てにおいて維那(法要進行を司る要職)をお勤めくださいました。

熟達した詠唱と辺りを庄する声量は余人の及ばぬところで、法要をより重厚なものとしていただきました。

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。 合掌

修行経過報告

小林 堯成

きよなり(たかなり)



完成をためると鏡鉢で三通鼓

二月二十日に大本山摠持寺へと修行に上がり、約五ヶ月が過ぎました。お盆の手伝いで一時帰山し、七月十一日の孟蘭盆会に参列する事ができました。

今は、四月一日より「菜頭」という配役を頂き、典座寮(台所)で本山全体の食について勉強しています。典座寮での修行は振鈴(起床を伝える鳴らし物)が鳴る二時間前に起床し(夏の間は午前二時頃)、お粥を作ることから始まります。毎回の食事の仕込みだけでなく、献立表の作成や食材の発注なども自分たちで行っています。

今年はコロナウィルスの影響で、摠持寺でも団体での参拝の受け入れの禁止、御霊祭りや授戒会など多くの恒例行事が中止になるなど異例の事態となっています。大変な年に本山で修行することにはなりませんが、今できることに精一杯取り組みたいと思っています。

合掌